

科目名 <Subject>	国際比較経営論特論A <Special Study of International Business Administration A>			現代経済経営専攻
科目区分	C	前期	研究室番号 <Office>	416
単位数 <Credits>	2			
担当教員名 <Name>	岡田 美弥子 <おかだ みやこ／OKADA Miyako>			

1. 授業の目的

企業経営の仕組みは、①戦略を立てる、②組織をつくる、③人を動かすという3つの段階から成る。この授業では、組織論（上記の②）を軸にして、企業経営の仕組みを理解し、企業の国際比較に必要な視角を身につけることを目的としている。

2. 授業の内容

まず、組織論が戦略論（上記の①）や人的資源管理論（上記の③）とどのように関連しているのかを理解する。次に、(i)組織の目標と組織の設計、(ii)オープン・システムとしての組織の設計状態、(iii)組織内部の設計状態、(iv)動態プロセスのマネジメントを、設定された課題を議論しながら学んでいく。その際には、日本企業と欧米企業の違いに注目する。最後に、授業で学んだ内容をもとに、各自で設定したテーマに沿って、日本と欧米企業の比較を行なう。

3. 授業の方法

以下のような手順で授業を進める。

- ① まず学生は指定された教科書をあらかじめ熟読し、かつ教材を参照して基本的な事項を理解し、授業で設定された課題に対するレポートを作成した上で授業に臨む。
- ② 授業では、教科書の疑問点を明らかにし、教材を利用してさらに深い専門知識を習得する。さらにレポートにまとめたディスカッション・ポイントをもとに議論を行なう。一方的な授業ではなく、議論を中心にして教員と学生、学生間の双方向的なコミュニケーションを図る。
- ③ 適宜、授業の内容に即した小テストを行なうことで、理解の定着を図る。また授業の最後には、受講生が取り上げたテーマで調査した結果を報告させ、その報告内容についてディスカッションを行なうことにより、授業の内容についての理解度を最終チェックする。
- ④ 以上の方針で、学生は授業の守備範囲で一定程度の理解に到達できると期待している。ただし理解が十分ではない部分については、オフィスアワーなどを活用して個別指導を行う。

4. 使用教材

Richard L. Daft(2001), *Essentials of Organization Theory & Design*, 2nd Edition, South-Western College Publishing(高木晴夫訳(2002), 『組織の経営学』, ダイヤモンド社)

上記の教科書以外の教材に関しては、適宜配布する。

5. 成績評価の方法

出席は必須である。欠席あるいは遅刻が2回以上ある場合、または1回であっても無断欠席をした場合は、履修放棄とみなす。成績は平常点（50点）と期末試験（50点）によって評価する。なお、平常点には、出席状況以外に、授業中に実施する小テストや課題レポート、授業態度（授業の準備状況やディスカッションへの貢献度）の評価を含む。6割以上の総合点を獲得した場合に合格とし、100～90点を「秀」、80～89点を「優」、79～70点を「良」、69～60点を「可」とする。

6. 履修上の注意事項

初回講義で履修に関する詳細な説明を行うため、受講希望者は必ず初回講義に出席すること。履修を制約するような条件は付けないが、成績評価において個人的理由は考慮しない。

科目名 <Subject>	国際比較経営論特論B <Special Study of International Business Administration B>			現代経済経営専攻
科目区分	C	前期	研究室番号 <Office>	416
単位数 <Credits>	2			
担当教員名 <Name>	岡田 美弥子 <おかだ みやこ／OKADA Miyako>			

1. 授業の目的

企業経営の仕組みは、①戦略を立てる、②組織をつくる、③人を動かすという3つの段階から成る。この授業では、組織論（上記の②）の事例によって、企業経営の仕組みを理解し、企業の国際比較に必要な視角を身につけることを目的としている。

2. 授業の内容

まず、組織が戦略（上記の①）や人的資源管理（上記の③）とどのように関連しているのかを、事例によって理解する。次に、(i)組織の目標と組織の設計、(ii)オープン・システムとしての組織の設計状態、(iii)組織内部の設計状態、(iv)動態プロセスのマネジメントを、事例によって学んでいく。その際には、日本企業と欧米企業の違いに注目する。最後に、授業で学んだ内容をもとに、各自で設定したテーマに沿って、日本と欧米企業の比較を行なう。

3. 授業の方法

以下のような手順で授業を進める。

- ① まず学生は指定された事例に関する教材をあらかじめ熟読し、授業で設定された課題に対するレポートを作成した上で授業に臨む。
- ② 授業では、事例に関する疑問点を明らかにし、教材を利用してさらに深い専門知識を習得する。さらにレポートにまとめたディスカッション・ポイントをもとに議論を行なう。一方的な授業ではなく、議論を中心にして教員と学生、学生間の双方向的なコミュニケーションを図る。
- ③ 適宜、授業の内容に即した小テストを行なうことで、理解の定着を図る。また授業の最後には、受講生が取り上げたテーマで調査した結果を報告させ、その報告内容についてディスカッションを行なうことにより、授業の内容についての理解度を最終チェックする。
- ④ 以上の方針で、学生は授業の守備範囲で一定程度の理解に到達できると期待している。ただし理解が十分ではない部分については、オフィスアワーなどを活用して個別指導を行う。

4. 使用教材

Richard L. Daft(2001), *Essentials of Organization Theory & Design*, 2nd Edition, South-Western College Publishing(高木晴夫訳(2002), 『組織の経営学』, ダイヤモンド社)

上記以外の教材に関しては、適宜配布する。

5. 成績評価の方法

出席は必須である。欠席あるいは遅刻が2回以上ある場合、または1回であっても無断欠席をした場合は、履修放棄とみなす。成績は平常点（50点）と期末試験（50点）によって評価する。なお、平常点には、出席状況以外に、授業中に実施する小テストや課題レポート、授業態度（授業の準備状況やディスカッションへの貢献度）の評価を含む。6割以上の総合点を獲得した場合に合格とし、100～90点を「秀」、80～89点を「優」、79～70点を「良」、69～60点を「可」とする。

6. 履修上の注意事項

この授業は、「国際比較経営論特論A」と連動しているため、「国際比較経営論特論A」と併せて受講してほしい。初回講義で履修に関する詳細な説明を行うため、受講希望者は必ず初回講義に出席すること。履修を制約するような条件は付けないが、成績評価において個人的理由は考慮しない。